

大学体育会男子部員らによる「ノリ」と「いじり」の創発と詩的連鎖

酒井晴香(筑波大学) 青山俊之(筑波大学大学院生)

田嶋翔(Katholieke Universiteit Leuven 大学院生) 井出里咲子(筑波大学)

1. はじめに

本発表では、大学体育会に所属する男子運動部の活動を取り上げ、新型コロナウイルス感染症の流行下におけるオンライントレーニング後の雑談に注目する。この中でも、部員らによる相互行為を通じた「ノリ」をメタ語用論的な詩的实践と捉え、ノリを生み出す「いじり」とあわせて創発の様相を記述することで、交感的・創造的な言語実践であるノリの儀礼的特徴を描き出す。さらに、参与者間の一体感だけでなく葛藤・不調和・不一致をももたらしうる言語実践として、ノリといじりの歴史・社会文化的意味を考察する。

2. 先行研究—詩的实践、「ノリ」と「いじり」

詩的实践とは、ある社会文化において指向、実践される「型」を指し、音韻、言語形式、発話行為、フレーム、環境等のあらゆる記号資源が反復や平行性を形成することでコミュニケーションに表出する(片岡 2022)。詩的实践においては、ある振る舞いや振る舞いの中の要素Aが、別の振る舞いや要素Bと「型」としての結束性を持つことによって、元のA以上のメッセージを喚起、創発する。これには、参与者の共同的な平行発話が即興的なユーモアを表すような共時的な実践(高梨 2022)と、歴史・社会文化的構築の産物としてコミュニティに埋め込まれた「コンテクスト化の合図」(Gumperz 1982)が暗黙知としてのメタ語用フレームを喚起し、命題内容以上のメッセージ(冗談など)を伝えるような通時的な実践(大津 2004)がある。こうしたコミュニケーションに遍在する詩的实践を描き出すことは、当該コミュニティの規範的な振る舞いを捉えることに加え、「型」に押し込められた対人関係の不均衡を記述することにも繋がる。

本発表で扱う「ノリ」について、「若者」にあたる大学生へのインタビューを行った小野寺(2013)は、コミュニティメンバーの連帯的な関係性に「ノる」ことで関係性の複雑さを縮減するなど、対等な親密性を築く諸相を社会的に考察している。一方で、滞りがなく場を盛り上げる／盛り下げない振る舞い、すなわち「ノリに乗る」ことの実態を記述した研究は見当たらない。他方「いじり」とは、他者を嘲ることでコミュニケーション参加者の笑いを誘発するものであり、言語的技法を用いた価値評価の発話を通して社会的紐帯を構築するものでもある。いじり行為は、言及指示内容だけでなく、jokingとしてユーモアなどのメタメッセージとともに解釈されるが、そうしたパフォーマンスが発話者の想定通りに遂行されない場合もある(Bell 2009)。近年、いじり行為は、イン／ポライトネスの議論において、人々のフェイスワークをめぐる動的な言語実践として扱われているが、いじり行為等を起点として連鎖的になされるノリや、それらのやりとりを通して参加者が作り出すコミュニティとしての実践にまで視野を広げた研究は少ない。

以上より本発表では、3.に示す男子運動部における詩的实践として、刻々と移り変わるノリといじりの相互行為的な様相を記述・分析する。加えて、いじり行為は常に「いじる者-いじられる者」という非対称的な関係を指標し、再構築する社会的実践でもあることを踏まえ、言語実践に立ち現れる対人関係を捉える分析的な枠組みにも言及する。

3. 分析データ

A 大学のある男子部活動は複数チームに分かれて活動しており、本発表ではそのうち1チームに焦点を当てる。新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、それまで毎日のように顔を合わせて活動していた部員らは、対面活動を厳しく制限されることとなった。こうした状況下で2020年4月中旬に部員らが自主的に始めたオンライントレーニング(以下、OT)には、オンラインの場集い、互いの様子を確認し、同じトレーニングを行うことで、チームの紐帯を保持する目的があった。

以下では、同年4月下旬～5月下旬に行われた計10回(1回約60分)のOT映像・音声データから抜き出したトレーニング後の雑談部分(総時間59分)を分析する。OTはビデオ通話ツールZoomで開催され、参加者らの同意を得たうえで、当時部員であった発表者の一人が参加して収録された。なお、初回OTは未収録で、2～11回目を分析データとする(田嶋 2021)。

OTの構成は、(1)Zoom上に徐々に部員が集まる開始前パート、(2)かけ声等によって開始と終了が境界付けられるトレーニ

¹ ここでの「詩」とは、詩歌や抒情詩等から想起される伝統的な詩ではなく、「言語の6機能」(Jacobson 1960)のうち詩的機能が表出した実践を指す。

ングパート、(3)その後の雑談部分のアフタートーク(以下、AT)からなる(図1)。このうち大学院生コーチが主導する(1)(2)で雑談はほとんど見られない。一方、(3)のATは初回OTから自然発生的に始まり毎回10分程度続けられた。(1)(2)には2~4年生部員と大学院生コーチ(C竹、C谷)の約35名が参加し、(3)のATには毎回そのうち10名程度が残った(図2)²。

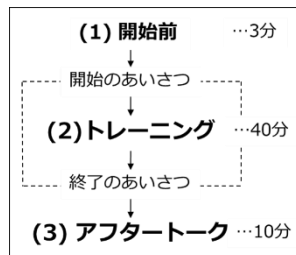


図1 オンライントレーニングの構成

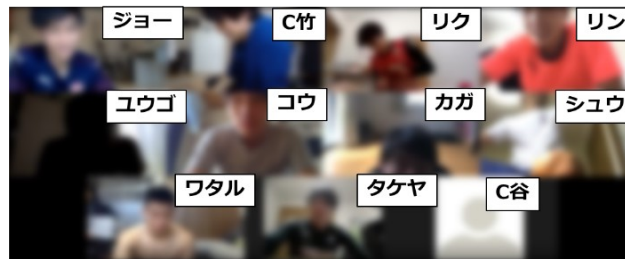


図2 ATの様子(5月8日データより、参加者は全て仮名、Cはコーチ)

4. 分析

本発表で分析対象とするATは雑談であるが「今日起こった出来事」等の経験語りはほとんど見られない。その代わりに多くの時間を占めていたのは、特定の参加者の逸脱的行為やその人自身を嘲る「いじり」や、わざと逸脱的な振る舞いをして他の参加者からの応答を伺う「ボケ」を起点とした連鎖であった。さらに連鎖を観察すると、複数名による〈いじり/ボケ→逸脱性維持・増幅の応答/逸脱性の指摘→笑い〉というメタ語用論的なフレーム³が浮かび上がる。4.ではこれをノリの詩的連鎖として記述・分析する。

4.1 ノリの起点—いじりとボケ

まずノリの起点となるいじりとボケを記述する。(1)では、ジョーがリクを呼び(1,5,8行目)、本来何色を着用しても良いはずのトレーニングウェアに言及して「赤ズボンやめて」(8,12行目)と理不尽な指摘をする⁴。これに対しリクは、「いいでしょ」と自らの正当性を主張し、さらにそれまで上半身を映していたカメラを下向きに動かし、ストレッチの姿勢を取りながら画面いっぱいに赤ズボンを映し出して「ほれ」「見て」と発話する(13-14,17,19行目,図3)。ここから、リクがジョーの発話から赤ズボンの着用を止めさせるような策動性を見出しておらず、逸脱性の指摘自体を目的として応答を期待するいじり行為として受け止めたことが窺える。このいじりに対するリクの応答は正当性の主張であり、ジョーにとっては逸脱性を維持、増幅させる形で行われたが、20行目以降ではジョー本人やこれを聞いていたほかの参加者からは笑顔が見られ、面白いものとして受け止められている。このようにして、いじりを起点とし、場の笑いに収束するノリが実践されていた。

(データ1) いじり:赤ズボン(20220508)

- | | | | | | |
|----|-----------------------------|--------------------------------------|----|----|-----------------------|
| 01 | ジョー | リク: | 16 | ? | 立ってみ立ってみ |
| | (3行省略, トレーニングについてワタルとC竹が話す) | | 17 | リク | ほれ((足を広げて赤ズボンを映す,図3)) |
| 05 | ジョー | hhhhh. MC hhhh. リク:: | 18 | C竹 | <※赤ズボンなんて> |
| | (2行省略) | | 19 | リク | 見て:(さらにポーズを変えてズボンを映す) |
| 08 | ジョー | リク:((1.0) リク赤ズボンやめて(.)) 赤ズボン. | | | |
| 09 | リク | [はい. | | | |
| 10 | | (2.0) | | | |
| 11 | リク | なんすか?? | | | |
| 12 | ジョー | リク(.) 赤ズボンやめて. | | | |
| 13 | リク | いやいやいや. いいでしょ.((ウェブカメラを下に向けてズボンを映す)) | | | |
| 14 | | | | | |
| 15 | ジョー | 合わないじゃん. | | | |



図3 ウェブカメラにズボンを映すリク(L17)

(2)では、ワタルとC竹が当日のトレーニングを振り返っていると(1-3行目)、シュウが食器をカメラに映して食事を始める(4行目,図4)。カガの言う「ゴールデンタイム」(6行目)とは、「身体づくりに最も効果的な食事のタイミングはトレーニングの直後」というチーム内で共有される知識に基づくものであるが、雑談を目的としたAT時にあえてカメラの前で食事をするのは逸脱的な振る舞いと言える。こうしたシュウの振る舞いはジョーから「ボケ」と呼ばれ、さらに「ツッコミ」を受ける。カガは「いらんて」(6行目)と不必要な行為であると指摘し、以前のATで同様のボケをしたジョーは「も

² 収録当初は年度初めの時期であったため新入生は参加していない。また、画像キャプチャーには匿名性を考慮し修正を加えている。

³ メタ語用論的フレームとは、「コミュニケーションで言われていること、そして特に為されていることを記述・解釈する時に明示的あるいは暗黙裡に用いられる「解釈などの行為の枠組」(小山2016)を指す。

⁴ 指摘した理由をジョー本人に尋ねたところ、「部内で赤いトレーニングウェアは珍しく、普段は着る人がほとんどいなかったため」と述べていた。

うやった」「俺も」(5,7行目)と、同じボケを繰り返してはいけないという不文律を背景として、ボケ内容を指摘する。なお、ジョーの発話からは「やる」ものというボケの意図性も窺われる。また、ワタルは到底実現できない「腕立てしながら」食べることを要求する(9行目)ことで逸脱性を増幅するが、シュウは「何言ってるか(わかんない)」(11行目)とあたかも発話を理解できないように振る舞い、もしくはワタルの発話に問題があることを暗示し、ズレを生んでいる。こうしたボケを起点とした複数名によるやりとりも(1)と同様笑いで収束し(12-14行目)、17行目以降では別の話題が開始される。

(データ2) ボケ: もう食うボケやったから (20220422)

01	ワタル	疲れた…	12	カガ	hh.
02	C竹	結構きつかった…?	13		((ジョーとC竹の大きな笑顔が映る))
03	ワタル	いやあきつかったつよ…	13	ワタル	なんで分からんねん.なんで分からんねん.((微笑みながら))
04	シュウ	((お碗を持ち何かを食べる, 図4)) ((5~14行目, ジョー, カガ, C竹の笑顔が映る))	14		
05	ジョー	¥おい () 食うボケもうやったから.¥=	15		((シュウは食べる姿を映し続ける. ジョー, カガ, C竹の笑顔は落ち着き, 視線や頭の向きをカメラから外す))
06	カガ	=¥ゴールデンタイムいらんて.¥	16		
07	ジョー	¥もう食うボケやったから.(俺も.¥			
08	カガ	hh. hhh.			
09	ワタル	シュウお前腕立てしながら食えよ.((無表情で))			
10		(5.0)			
11	シュウ	ちょっと何言ってるか(わかんない.)(首をかきあげて)			



図4 ウェブカメラに向かって食事をするシュウ(L4)

4. 2 ノリの創発における類像性・指標性

(2)で示したように、複数人によってノリが形作られる中では、いじりやボケの対象に対して連鎖的に発話が向けられる。(3)(4)では、そうした逸脱性を指摘する発話の連鎖において、類像性や指標性が利用されていることを述べる。

(3)では、シュウが参加者にことわりを入れることなくPC画面を鏡代わりにしてコンタクトレンズを装着している(1-2行目, 図5)。これは雑談の場には適さない個人的な行為であり、さらに下脛を伸ばしてコンタクトを目に入れるさまは不格好な姿とも取られる。シュウのこの行為は3行目以降で4人の参加者より一斉に指摘を受ける。C谷やジョーはPC画面を鏡代わりにすることの不適切性を述べ(3-4, 5, 7行目)、ワタルは「今まで」、つまりトレーニング中にコンタクト未装着の「裸眼」であったことを指摘する(6, 9行目)。これらはシュウの行為そのものに対して手短になされた反射的なツッコミと言えるが、この後、類像性を利用してシュウの行為の様態を様々に取り上げたツッコミが見られる。ジョーはテ形の延伸でシュウの複数動作を実況的に描写したうえで「じゃないのよ」と不適切性を指摘する(10行目)。これに続き、ワタルは画面に映し出されたシュウの姿との類像性から、さらに逸脱的で倫理的には受け入れられないであろう<中指を立てる>動作と結びつける(11-13, 16, 17, 19-20行目)。3行目以降の発話は至るところで重複しており、大きくは<シュウのボケ→ほかの者のツッコミ>という構造、そしてそのツッコミ内部における言及対象は<逸脱的行為をするシュウ>から、次第に行為そのもの、すなわち<画面に向かい中指を使ってコンタクトを装着する姿>へと推移している。こうして、ボケの逸脱性を指摘する技法が連鎖の中で推移し、シュウという行為主体から離れた類像的なツッコミが行われている。

(データ3) コンタクト (20220520)

01	シュウ	((ウェブカメラに向かいコンタクトレンズを目に入れ	15	ジョー	=¥そんな<コンタクトの外し方ね.¥
02		ている, 図5))	16	ワタル	[中指]
03	C谷	お前Zoomの自分の画面でコンタクトすな.(1.0)Zoom	17	ワタル	なん.なん[その死ねっていう中指たてとるだけやん.
04		の自分の画面でコンタクトすなよ.	18	ジョー	[指の腹でやれや.
05	ジョー	[[鏡で(やれ)よ.	19	ワタル	中指たてとるだけやんそれただの.(1.0) なんやねん.
06	ワタル	[[() 今まで何. コンタクトつけてなかったん.	20		それ.
07	ジョー	hhhhh.>ちがうちがう.<			
08	カガ	[[コンタクト().() コンタクト().			
09	ワタル	[[裸眼でやとったやん.裸眼でやとったやん.			
10	ジョー	外し↑て↓: 中身確認 [し↑て↓:(じゃないのよ)			
11	ワタル	[も:()ちやうもう死ねってや			
12		ととんねん. ちやうちやう死ねってやととんねん(0.5)			
13		[普通なか. 中指でやらんねん. 普通 =			
14	?	[hh			

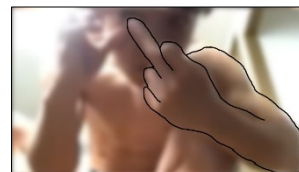


図5 ウェブカメラに向かってコンタクトを入れるシュウ(L2)

⁵ データの聞き取り不可能部分は「()」で示し、聞こえなかったモーラ数分を空白で記す。また聞き取りが不正確な部分は「()」を用いて「鏡で(やれ)よ」(データ3, 5行目)のように記す。

(4)は、(1)直後のやりとりで、リクのトレーニングウェアに対するいじりである。C谷による「赤パンツやめろ赤パンツ」(23行目)では、8行目でジョーが用いた「赤ズボンやめて赤ズボン」の形式における「赤ズボン」を「赤パンツ」、「やめて」を「やめろ」に変えた平行体(parallelism)が用いられている。さらに、赤パンツと元プロボクサー「具志堅用高」を指標類像的に結び付け、「以来の」とく具志堅用高とリクくらいしか赤ズボンの着用者はいないことを述べて「赤パンツやめろ」と繰り返す。このようにリクに対するいじりを継続する中で、C谷はジョーと同一構造の発話をすることによって、いじる側としての同調のスタンスを示す。なお、ジョーはC谷の平行体発話について、自分が用いたツッコミだと主張するが(26行目)、C谷はこれを無視してリクへのいじりを続けている(30行目)。こうして、<いじるジョー、C谷>-<いじられるリク>という関係が生じていながらも、発話における言及対象は連鎖の中で徐々にリク本人の赤ズボンから遠ざかっているとと言える。

(データ4) 赤ズボン_2 (20220508)

08	ジョー	リク: [(1.0) リク赤ズボンやめて, 赤ズボン.]	26	ジョー	<それ俺のやま>
09	リク	[はい.]	27	C竹	[[hhh]
		((15行省略(データ1)ジョーが赤ズボンを履かないよう指摘し、リクは赤ズボンを映す))	28	ジョー	[[おっミュートにすんなま まじスペースだけで参加してくる.]
25	C谷	リク(.) 赤パンツやめろ赤パンツ.	30	C谷	リクリク(.) 具志堅用高以来の赤パンツやめろ.

5. 考察とまとめ

本発表における大学の部活動後のATに表出するノリといじりには、状況的な逸脱を関係的に秩序づける交感的なコミュニケーションの諸相が観察された。ノリといじりにみられる即興的な演技や笑いの創発は、ロジェ・カイヨワの『遊びと人間』という模倣や眩量の遊戯的特徴に相当する。一方で、集団的なスポーツに取り組むコミュニティにとって、トレーニング後のATは日常的な競争性やコロナ禍もあいまった社会不安を緩和する習慣的な行為でもあった(田嶋 2021)。

最後に、ノリといじりを過程論的に捉える枠組みを考察する。いじりは、いじる者といじられる者の対人関係的な非対称性と、状況的には記号的なヒト・モノ・コトをネタ資源にした笑いの共有による共同性が複層的に生じる実践である。いわば、いじりは非対称性をメタ的に認知・交渉・調整し、コミュニケーション実践を共同で成り立たせる参与者としての対等性をも演出する儀礼的な実践である。そのようないじり実践には、不/調和・不/一致そのものをめぐるディスコードダンスが潜在的に生じうる(小山 2018)。よって、いじりとノリの「型」を身につけ、行為を動機づける言語社会化の過程に加え、いじる者の顕在的威信と、いじられる者が持ちえる葛藤・抵抗感にもとづいた潜在的な威信の発露、さらにディスコードダンスを収束的・発散的に適應する過程が垣間みえるものとして、ノリといじりの詩的実践を分析・考察する意義があるだろう。

参考文献

- Bell, D. N. (2009). Impolite responses to failed humor. In Norrick, Neal R. and Chiaro, Delia (eds.). *Humor in Interaction*. pp. 143-163. John Benjamins Publishing Company.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and Poetics. In Sebeok T. A. (ed.). *Style in Language*. pp. 350-377. Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press, and New York, London: John Wiley & Sons.
- 片岡邦好(2022). ポエティクスの射程 近年の詩的分析の展開を踏まえて 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士(編)ポエティクスの新展開 プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて, pp.3-37, ひつじ書房
- 小山亘(2016). メタコミュニケーション論の射程—メタ語用的フレームと社会言語科学の全体— 社会言語科学, 19(1), 6-20.
- 小山亘(2018). 社会言語学とディスコードダンスの空間 葛藤と含意の絡み合いによる現代世界の編成とプラグマティズムの原理 武黒麻紀子(編) 相互行為におけるディスコードダンス 言語人類学からみた不一致・不調和・葛藤, pp. 237-260, ひつじ書房
- 小野寺雅彦(2013). 「ノる」とはどういうことか—現代若者の「親密圏における連帯」— 年報社会学論集, 26, 51-62.
- 大津友美(2004). 親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に注目して— 社会言語科学, 6(2), 44-53.
- 高梨博子(2022). 観光のエスノポエティクス 並行性と響鳴による詩的実践 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士(編)ポエティクスの新展開 プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて, pp. 161-188, ひつじ書房
- 田嶋翔(2021). 雑談を通じた人間関係構築の分析—大学サッカー部のオンライントレーニングを事例に— 筑波大学国際総合学類卒業論文